

## 言葉や文字の正しさ

昔は、“黒板”は黒かったものである。だから、“黒板”と名付けたのである。然しながら、今の黒板はたいてい“深緑色”をしてゐる。それでも、やはり“黒板”と呼んで、決して“緑板”とは誰も言はない。

「緑色をしてゐるのに“黒板”と言ふのは変ではないか。これからは“緑板”にしよう」と主張する人があったとしても、これに賛成する人などゐないであらう。

また、“白墨”といふ言葉がある。この言葉などは、初めから不合理な言葉だった。なぜなら、“墨”といふ字は、その字が示すやうに、“黒い”煤と粘土とを混ぜて作ったもので、“黒い”物に決つてゐるからである。それなのに、墨と同じやうな形をしてゐて書く時に使ふ物だといふので、色が“白い”から“白墨”と名付けたものである。

「白くて黒い物」といふ事になるが、言葉は理窟などどうでも良いのである。解りが良い事の方がずっと大事なのである。だから、白墨の色が赤ければ「赤い白墨」と言つて、決して“赤墨”とは言はない。私は、言葉のこの不合理さに何とも言へない面白さを感じずる。

“一”といふ字は、恐らく世界中が“一本の棒”でこれを表してゐるだらうと思ふ。漢字でもローマ字でもアラビヤ数字でも皆さうである。然し、

漢字ではこれを。“一”と横に書き、ローマ字では縦に“|”と書く。アラビヤ数字ではたいてい“/”と斜めに書く。

なぜさう書くのだらうか。理由は唯一つ、「今までさう書いて来たからさう書く」のである。そのほかに何の理由があらうか。“1”を一本の棒で表すといふことには理由があるが、これを横に書くか縦に書くかといふ事には、さうしなければならないといふ理由は無いであらう。私たちは今までの習俗、伝統に従つて書くだけである。

言葉や文字においては、この“習慣”“伝統”が大事なのである。習慣や伝統のお蔭で言葉や文字はその生命を保つてゐるのであって、習慣・伝統を無視したらおしまひである。一片の理窟や理論でこれを左右してはならないことを、私は“黒板”や“白墨”に見るものである。

「私たちの祖先の感情の脈打つてゐる言葉だけが、自分の思想を十分に表現できる」と言つたアナトール・フランスの言葉には、私も全く同感である。